

くの皮などを剥く少女たち。自分と見くらべている「めぐみ」さんの心は複雑に揺れるのです。

【3】子どもの世界は学校です

① アメリカでの3ヶ月 ～ パロアルトの4年生の可奈ちゃん
クラスには日本人と、Korean、Chinese、ロシア、イスラエル、ポーランドから来た友達があります。日本の学校と違うことは、毎朝、星条旗に向かって、右手を胸にあて、pledge（誓いの言葉）を言います。また、毎週金曜日には Spelling test をします。（覚えてるのがたいへんだよー）でも、父母がカードを作って応援してくれるので、可奈は一生懸命に覚えしました。今週は100点とれました。

② ブルネイの王立学校 ～ 立派な施設に驚く関根さん

此の学校はイギリス式で13年生GCE終了までである。先生は主にイギリス人、オーストラリア人、ニュージーランド人で極めて優秀であるロイヤルファミリーの子どもには、いつも、白衣の看護師のようなお付きがいて、生徒と一緒に教室まで付いてくる。登校時の車は、ベンツ、ジャガー、BMWの運転手付きだ。教室も体育館も冷房完備である。食堂は王宮と同じシェフがつくる料理を楽しめる。

③ 孤独＝闇の世界から ～ activity で自信をつける

アトランタから東大入学の修子ちゃんの新聞より抜粋

14歳のわたしにとって英語という壁は思った以上に厚かった。孤独は精神的には闇だったのです。不安で不安で、言葉や勉強や友達づくりなどの余裕は全くなかった。この状態から救い上げてくれたのは音楽と美術でした。

日本時代から習っていたピアノを、また始めたことと、授業で美術をとったことが、生活にリズムと喜びを取り戻したのです。ピアノはクラブで、美術は授業のクラスで頑張りました。語学と違って、以前から大好きだったこれらは、頑張れば頑張るほど評価されました。10年生の社会のAPクラスでは、英語力の弱さをはっきりと自覚させられましたので、歯を食いしばってついていきました。これをきっかけに11,12年でも、数科目でAPクラスをとることができました。GPAも4.0を越えました。推薦状ではカウンセラーの先生が、アクティビティーの活躍や、クラスの頑張りを好意的に書いてくれました。受験した大学はすべて合格できました。高校生活を毎日平凡に充実させたことが、大学にも評価していただいたようです。



張江 幸男（はりえ ゆきお）

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA 顧問

前全日本空輸（株）海外子女教育相談室長、元三菱商事（株）相談室長、元ニューヨーク日本人学校校長、元台北日本人学校教頭

④ 楽しく忙しいタンザニア ～ ノゾミのダブルスクール

小学校4年生。タンザニアのイギリス系のインター校に入りました。「ハロー」「サンキュー」「バイバイ」の三つで友だちをつくりました。だんだん慣れてくると、人間関係や人種差別のことも感じられました。そんな中でも海で遊んだり、誕生日パーティーに呼び合ったりする友達もでき、真っ黒になるほど遊びまわりました。此のインター校は12時で授業は終わります。

私たちは午後2時から6時まで、月、水、金の三日間、補習授業校に通いました。全校生徒15名。全員が仲間です。赤道直下の刺すような日光を浴びながら、キックベースボールを楽しみました。ICU高校で学んでいます、タンザニアの遊んだことばかりが思い出されます。

【4】PTAで賞を頂きました

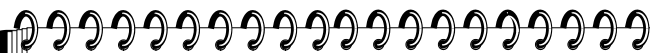
～ Very Special Person Award

5歳の息子さんを連れて、ロサンゼルスへ渡った智子さんは、お子さんが3年生の時役員になりました。4年生からはルームペアレントをやりました。母親が学校にいくことが、子どもにとって嬉しく、励みになると分ったからです。事務的なことから、テストの採点をしたり、理科の実験の助手を頼まれたりしました。友人や色々な経験が増えていきました。6年生の最後にVSPAという賞を頂戴しました。「よく来てくれたは」とか、「あなたのような人が必要なのよ」という言葉に励まされたのです。

【5】駐在員の活躍

— 日本人学校、補習授業校への協力

世界の各地に巡回相談と、教育施設の訪問に出かけました。そこでお会いした駐在社員たちの、教育施設に対する献身的な尽力に頭の下がる思いがしました。中国青島の小林さんは家族新聞で、A社の支店長さんは、青島日本人学校の開校に尽力されましたが、強く要請され、校歌の作詞もされたと報じています。多謝。多謝。



海外・帰国子女教育専門機関 JOBA

〒145-0064 東京都大田区上池台 3-39-9

TEL : 03-5754-2240 FAX: 03-5754-2241

HP : www.jolnet.com



張江先生が海外のご家庭に勤めておられる「家族新聞」の、世界中の子ども・保護者の記事の紹介です。

海外生活で日本語を忘れないためにスタートしますが、書き続けることにより、「例外なく文章を書く楽しさがわかり、一つの生き甲斐にまでなった」との先生の報告は、海外生活中の家庭への貴重なアドバイスです。

現地校での、小学校高学年からの学力は書く力（Essay）で決まります。得意な言語の日本語でしっかり書けることが、Essayの力となります。

そのためにも、「家族新聞」スタートしてみませんか？